

# 慶応義塾大学斯道文庫蔵写本「廿四孝詩」について

橋 本 草 子

## 一

唐末五代から元、明にかけての中国に於ける「二十四孝」の伝承の変遷は、中国に残された遺物だけでは十分に明らかにすることができない。日本や朝鮮など、周辺諸国に伝えられた文物をも総合的に調査することによって、初めてその全貌がわかってくる。そのための調査の一環として、筆者は日本に伝来した「二十四孝」の諸本の調査を続けているが、本稿ではその過程で発見した一つの写本を紹介したい。

日本に伝わる「二十四孝」関係の写本は大きく分けて

- 一、「孝行録」系
- 二、独立刊行の「全相二十四孝詩選」系
- 三、「日記故事」巻頭付属の「全相二十四孝詩選」系の三系統があることは徳田進『孝子説話集の研究』の成果を受けて定論となっている<sup>(1)</sup>。

一の『孝行録』は、元の至正六年（一三四六）に高麗の権準が画工に描かせた二十四孝図に李斉賢が賛を付け、

さらに権準の父の権溥が三十八条の賛を追加して、合計六十二条の孝子説話から成る書物である。朝鮮では権準の孫にあたる権近による注解本が刊行されてひろく流布し、日本にも伝えられているが、中国には伝存していない。しかし、その前半の二十四章の孝子の顔ぶれは宋元の墓室壁画に残される孝子と一致しており、宋元時期の二十四孝の内容を伺わせる貴重な資料といえる。

二の独立刊行の『全相二十四孝詩選』とは『孝行録』とほぼ同じ頃に、中国南方で郭儀祖、字は居敬によって編まれ、遅くとも明代はじめに建陽の書肆によって出版されたことが確認できるものである。現存する唯一の刊本は明のはじめ、洪武年間に刊行されたと思われるものの不完本が北京の国家図書館に所蔵されている。<sup>(3)</sup> そのほかには日本に残されたいくつかの写本が、嘗て刊本が日本に伝来していたことを証明している。

三は明代もかなり遅く萬曆年間（一五七三—一六一九）になってから新たに『日記故事』の巻頭に合冊された形での『全相二十四孝詩選』が刊行されるようになる。この種の刊本は中国にも日本にも数多く現存しており、<sup>(4)</sup> また寛文年間以降、和刻本も多数刊行されている。

二の独立刊行された『全相二十四孝詩選』の日本への伝来を裏付ける写本としては身延文庫蔵の「全相二十四孝詩選」、川瀬一馬氏旧蔵の主管衛門書写の「全相二十四孝詩註」、月庵（一色直朝）の「新刊全相二十四孝之詩選」など数種があるがそれらはすべて文字のみで「全相」という題名が示す挿し絵は残されていない。わずかに龍谷大学図書館所蔵の「新刊全相二十四孝詩選」甲本が、原刊本の挿し絵をもとに日本人の画家が描いたと思われる絵図を各葉上部にとどめており、これまでは唯一の挿し絵付きの写本として紹介されてきた。

ところがこれまでに紹介されてこなかったもう一種の挿し絵付きの写本が慶応義塾大学斯道文庫に所蔵されている。筆者はかなり以前にこの写本の書影を入手していたが、最近になってこの写本と龍谷大学蔵本との関係に気付

いたのであらためて紹介することにした。

本稿ではまず、斯道文庫所蔵の「廿四孝詩」と題された写本のあらましを述べ、その中の「新刊全相二十四孝詩選」の書影を紹介したい。さらにこの写本と龍谷大学蔵の写本との関係についても考察してみたい。

二

この写本の存在についてはこれまで、阿部隆一『増訂中國訪書志』<sup>(5)</sup>で触れられているだけで、詳しい内容の紹介は未だ行われていないようである。そこでまず書誌事項を記す。

函架番号091/ト170/1「廿四孝詩」。線装本で、縦二〇・七センチメートル横一五・六センチメートル、褐色表紙の左肩には「廿四孝詩 完」の題簽。この表紙は後補のものと思われるが題簽の右辺に薄く「廿四孝之図」という文字が見え、その上から褐色が塗られている。次に元来のものと思われる白色内表紙、左肩打付けに「二十四孝」の文字。右肩に「藤嶋蔵書」の蔵書印あり。内表紙見開き左隅に「二十四孝者延平尤溪郭居敬撰」の文字あり。虫喰い跡は裏打ち補修され、最終篇の上部は断ち切られているなど、何度かの改装を経たと思われる。

挟み込まれた紙片によれば「昭和三十九年三都古典連合会大入札会」で購入された事が知られる。同入札会目録を調べると四十四頁に「新刊全相二十四孝詩選」「足利時代写、図入、版本は傳存極稀」として此の書の第六丁裏と七丁表の写真相が掲載されている。

本文は①「新刊全相二十四孝詩選」、(第一丁から第六丁)、この部分のみやや厚手の黄色がかった用紙を用いている。②「二十四孝詩」、(第七丁から第八丁)。③「二十四孝傳」、(第九丁から第十一丁)。この第十一丁の最後には次の「二十四孝之詩」と同筆と思われる筆で「從此張前拾壹枚仁如和尚自筆」の書き込みがある。④「二十四

孝之詩」(第十二丁から第十五丁)、⑤無題(第十六丁から第二十丁)、⑥無題(第二十一丁から二十二丁)、⑦「二十四孝」(第二十三丁から二十六丁)の七篇から成る。

①はこれから紹介する挿し絵付きの写本。②は北山俊承「蔡順分樵」をはじめとする禅僧による詩、二十四首を並べる。③は「感蟠明目」(晋、盛彦)「扇枕温被」(後漢、黄香)などの孝子の伝、二十五話が記されている。これらの孝子には郭居敬撰「全相二十四孝詩選」所収の孝子とは一致しないものも含まれている。

前述の第十一丁最後の書き込みによれば、①②③はすべて、天文十三年(一五四四)から天正二年(一五七四)まで相国寺鹿苑院の第九十一世塔主職をつとめた仁如集堯(一四八三—一五七四)の自筆とみることができ。但し①の用紙は他と異り、字体も②③とは異った楷書体であることから、仁如が他に依頼して絵図と共に書写させた可能性も否定できない。

④は大舜をはじめとする「全相二十四孝詩選」所収の二十四人の孝子及び伯愈に関する五言詩と伝を記したものであるが、郭居敬撰の「詩選」の五言詩とならんで、異なった五言詩が併記されている場合があり、注意すべき写本である。また、伯愈については後述の龍谷大学蔵本と共通する別種の刊本から写されたものと思われる。⑤は「通鑑」「孔子家語」「事文類聚」「孝子傳」「蒙求」「傳灯録」「氏族排韻」「列女傳」「高士傳」「千字文」などの中国の書物から孝子に関する話を抜き書きしたもの。⑥は二十四首の孝子に関する五言詩をあつめたもの。詩の作者は記されていない。⑦は二十四人の孝子の故事を記したものであるが孝子の顔ぶれは郭居敬の「詩選」とは一致しない。

①以外の六篇にも探求すべき興味深い問題が多々含まれるのだが、本稿ではとりあえず①の「新刊全相二十四孝詩選」写本にしぼって紹介と考察を進めることにする。

まず内表紙の裏にあたる見開き左下に「二十四孝者延平尤溪郭居敬撰」の文字があり、次に第一丁から刊本を写したと思われる上図下文の写本が始まる。十九ページから三十一ページに掲げる書影を参照されたい。これを現存する唯一の刊本である中国国家図書館蔵本の第一丁と比較してみると、国家図書館本では「全相二十四孝詩選」、斯道文庫本は「新刊全相二十四孝詩選」である。斯道文庫本は国家図書館本より後に新たに版を起したものであることがわかる。また国家図書館本では題目の後に「延平尤溪郭居敬撰」の文字があり、斯道文庫本にはそれが無い。おそらく原本にはあったものため内表紙見開きに前述の文字を書き加えたのであろう。挿し絵は新しく書かれたもの、下の文章も後述のようにいくつか改変が見られる。

次に三十二ページに同じく挿し絵つきの写本である龍谷大学所蔵の甲本の第一丁を示す。これで見てもわかるように龍大本の挿し絵は原刊本の絵を日本風に書き換えたものである。そして原刊本では一頁におさめられていた二孝子の故事を、一孝子ずつに改めている。

以上の二本に、先述の北京国家図書館蔵刊本及び龍谷大学所蔵の乙本を加えた四本を、成立時期の順序にならべると、①北京国家図書館蔵刊本（以後A本とよぶ）、②斯道文庫蔵本（以後B本とよぶ）、③龍谷大学蔵甲本（以後C本とよぶ）、④龍谷大学蔵乙本（以後D本とよぶ）の順になるであろう。

この四種のテキストを全体にわたって比較したところ、次表のような結果が得られた。なお、A本の孝子の配列は他の三本とは異なるが、ここでは他の三本の配列順に並べた。文字の異同については、俗字・異体字・略字については同一字と見なした。

8	7	6	5	4	3	2	1	
老萊子	王祥	曾參	閔損	孟宗	丁蘭	漢文帝	大舜	孝子名
ウ イ ㊦	エ ウ ㊧ ア	㊨ ㊩ イ ア	㊪	エ ㊫ イ ア	ウ イ ア	ア	ア	
著五綵編爛衣 戲於親側 為親取食上堂	不慈欲譜之 母嘗欲食生魚 祥臥冰上水忽自解 每冰凍天曉有	肩薪歸未晚 名參字子與 貧無具母齒其指 即採薪以歸	欲遣後母	須臾春筍出 泣而告天 地上出筍數莖 持歸作羹以供母	形容在日身 以報本 蘭見之	本養無怠湯藥必見嘗	○	国家図書館本(A)
身有?色斑爛之衣 戲於親側 為親常取食上堂	不慈欲譜之 母嘗欲生魚 祥剖冰求之冰忽自解 每冰凍天寒有	負薪歸來晚 名參字恭輿 貧無具母齒其指 即負薪歸	(A)に同じ	須臾春筍出 泣竹而告天 (A)に同じ 持歸作羹供母	形容在日新 以報其本 蘭歸見之	奉養無怠藥必親嘗	○	斯道文庫本(B)
(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ (A)に同じ (B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ 貧無具母齒其指 即負薪以歸	(A)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (A)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ	○	龍大甲本(C)
(B)に同じ (B)に同じ 身省五色斑爛之	(B)に同じ (B)に同じ (A)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(C)に同じ (C)に同じ (C)に同じ	欲遣後母	(B)に同じ (B)に同じ 地上筍數莖 (B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ	○	龍大乙本(D)

慶応義塾大学斯道文庫蔵写本「廿四孝詩」について

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
蔡順	剡子	朱壽昌	郭巨	王褒	黄香	董永	楊香	唐夫人	黄山谷	姜詩
イ ア	ウ ① ア	ア	⑦	⑦	イ ⑦	エ ウ イ ア	ア	㊦ ① ア	㊦	㊦ イ ア
黒樵奉萱闈 告米贈君婦	州子父母 入鹿群之中 告斬乃免	無し	無し	無し	年九歳而失母 暑則扇其床枕	天妃陌上迎 来為永妻 令織縑三百匹 我天之織女	○	崔南山家之盛室比 唐夫人事姑至孝 皆如新婦愛敬	無し	妻奉順尤謹 夫婦當力作 湧泉味如江水
黒樵奉親闈 牛米贈君婦	剡子父母 入鹿群中 告訴乃免	○	子可再有母不可再得	母遇雷震	九歳失母 暑則扇其枕席	天妃陌上迎 求為永妻 令織縑三百匹 我天上之織女	○	崔山南家之盛郷族罕比 唐夫人事姑孝 皆得如新婦孝敬	宋時人	奉順尤篤 夫婦當力作 湧泉如江水
(B)に同じ	(B)に同じ (A)に同じ (B)に同じ	○	子可再得母不可再得	毎遇雷震	九歳而失母 (B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	○	(B)に同じ (A)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (A)に同じ
(B)に同じ	(B)に同じ (A)に同じ (B)に同じ	○	(B)に同じ	(C)に同じ	(B)に同じ (C)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	○	皆得如新婦愛敬 (A)に同じ (B)に同じ	宋朝人	(B)に同じ (B)に同じ (A)に同じ

24	23	22	21	20	
陸續	田真	張孝張禮	吳猛	庾黔婁	
イ ア	㊶ ㊷	ア	ア	エ ウ イ ア	ウ
賓客見懷橘	夜議研分爲三 聞分析尚如此	碩伐弟死	去已而慈其親也	即棄官歸家父疾 但普糞苦則爲佳 黔婁嘗之甜滑 至夕稽顙北辰	王莽末天下 順拾桑椹赤黑異器 遺米三斗
陸續字公紀 賓客而懷橘	夜議研分爲三 聞分析尚如此	願代弟命	去已而嚙其親也	即棄官歸家父疾 但普糞甜則苦爲佳 黔婁輒取管之味轉甜滑 至夕稽顙北辰	王莽末天下 順拾椹黑赤異器 遺米二斗
(B)に同じ	(A)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ
(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ (C)に同じ
(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ	(B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ (B)に同じ	(B)に同じ

この表からわかるように、A本に欠落している黄山谷、王褒、郭巨、朱寿昌の四話を除く二十話中、十八話にはすべて何らかの改変が見られ、その改変の仕方はB本、C本、D本ではほぼ同一である。ただその中にも表中のアイウを○でかこんだ部分のようにB、C、D本の相互の間に多少の相違が見られるものがあるが、それらは皆どちらかの単純な文字の脱落や書き間違いと思われるものである。A本以外の三本の内容に内容に関わる重要な相違は見られない。三本は同一の系統に属すると見てよいであろう。ただ、D本は基本的にC本を筆写したものではあるが、独自に朱点、訓点、送り仮名、書き込みを加えており他書をも参照して独自に校訂した形跡がうかがわれる。たとえば8老萊子の㊶や11唐夫人の㊷は、A本と共通する部分があり、そのほかにもA本系統の写本を参照したかと思



われる書き込みがある。

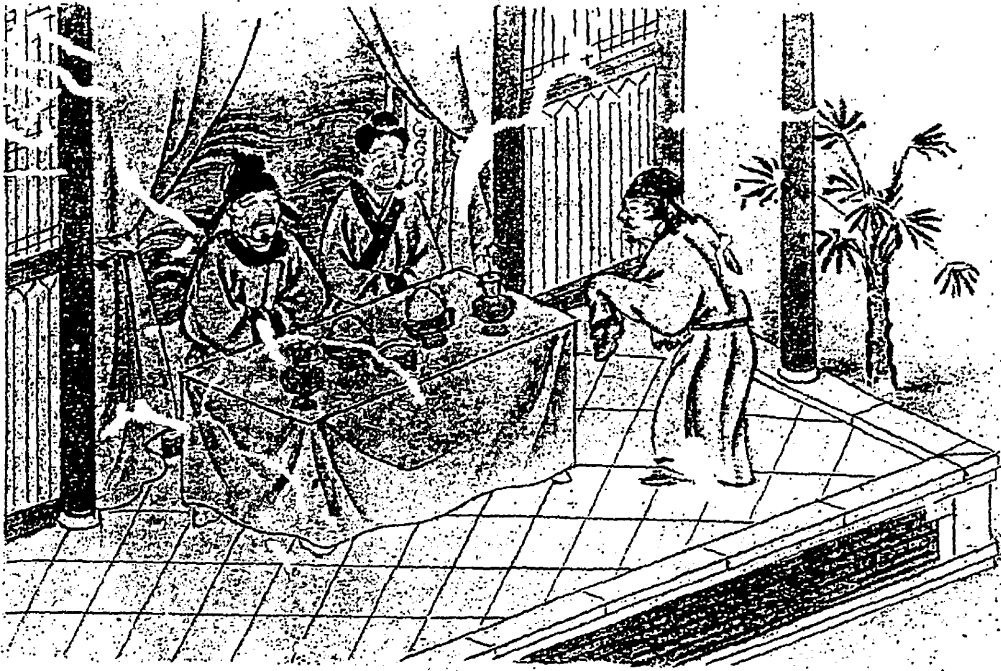
さらに三本の挿し絵の比較を行えば、興味深い問題がいくつか発見される。たとえば3丁蘭ではA本およびB本では画面左側に立つ人物は女性で、よく見ると針状のものを手に持っている。これは文中に「其妻不敬以針刺之」とある丁蘭の妻を描いたものらしい。しかしC本では人物は右側に立ち、明らかに丁蘭を描いている(図M)。4孟宗ではA本とB本では構図が大きく異なっている。B本とC本は構図が似ているがC本は雪景色を強調している点が異なる(図N)。10黄山谷では黄山谷が提げている湯器の形が異なっている(図O)。11唐夫人では傍らに立つのがA、B本では召使いらしい人物であるがC本では子どもである(図P)。12楊香では、虎にたちむかっている中央の子供の性別は不分明だが、C本では明らかに男児になっている(図Q)。13董永ではA、B本は室内の場面だが、C本では戸外の場面になっている(図R)。16郭巨では掘り出された黄金がC本では釜になっている(図S)。19蔡順ではC本ではかごがもう一つ付け加えられ、牛蹄が加わっている(図T)。他の絵図も詳細に検討するならば興味深い問題があるのだが、総じて言えばA本とB本は構図や人物の配置で共通点が多い。C本は他の二十四孝図をも参考にして人物の配置や服装を書き換えており、和様化の傾向が著しい。

以上のように挿し絵には大きな改変がみられるものの、テキストからみると、B・C・D本は、同一の系統の本をもとに書写された可能性が高いと推定できるのだが、さらにこの推定を裏付けるのが両写本をめぐる人間の関係である。

龍谷大蔵写本 甲本

丁蘭

(圖M)



孟宗

(圖N)





黄山谷

(図〇)



唐夫人

(図P)

楊香

(圖 Q)



董永

(圖 R)





郭巨

(図 S)



蔡順

(図 T)

龍谷大学蔵本には前述のとおり、挿し絵付きの甲本と文字のみの乙本があり、両本の複製本が出版されている。<sup>40)</sup> 同書におさめられた禿氏祐祥氏の解説によれば甲本の筆写年代は室町時代中期、本文と図絵は同筆であろうと推定されている。

甲乙両本ともに大舜に始まり陸續に終わる「二十四孝」の後ろに伯愈の頁があり、甲本では「或本無黄山谷有伯愈」の注記がある。両本ともにその後には八景詩八首、玉澗詩四種、牧溪畫三幅の賛、子庭作石菖蒲の賛、虚堂禪師の詩一首が写されている。<sup>41)</sup>

禿氏祐祥氏によれば、乙本の巻尾に本願の鼎印と光昭の方印が押されていることは、慶長元和の頃、西本願寺第十二代の法主であった准如上人の手沢本であることを示しており、その頃、甲本と共に他から入手したものであるとされている。以上がこれまでに明らかになった龍谷大学蔵写本をめぐる事実である。

本稿では准如上人のもとに甲乙両本の原本をもたらしした人物として山科言経<sup>やましなときつね</sup>を想定し、次ぎにその周辺を探ってみることにする。<sup>42)</sup>

山科言経は天文十二年（一五四三）正二位権大納言山科言経<sup>とまつく</sup>の息子として生まれ、天正三年（一五七五）冷泉為益の女を娶り、翌五年長子言緒<sup>ときお</sup>を得た。天正十三年（一五八五）六月、おそらくは所領を巡る争いのため勅勘を蒙り、家屋を売り払って妻の姉の嫁ぎ先である興正寺頭尊佐超とその母の本願寺頭如光佐室を頼って摂津中島に居を構えた。さらに天正十九年に秀吉の命で本願寺が京都に移転すると言経も京都に移ったがその際にも光佐や佐超からの援助を受けた。言経は漢方医術の治療を行い、和漢の古典に関する学識、家職である衣紋についての知識や、

豊臣、徳川家との広い人脈などで本願寺にとっても有用な人物であったらしい。その日記である『言経卿記』には佐超室や光佐室の名が多く登場するが、それに伴って、准如光昭の名も頻出する。光昭は天正五年、頭如光佐とその室如春の三男として生まれ、後に佐超の女と結婚する。頭如光佐の長男が教如光寿、次男が頭尊佐超である。山科言経と准如光昭はこのように光佐室および佐超室を通じて密接なつながりがあった上に、言経の長子山科言緒と准如は同年の生まれということで親近感も強かったようである。『言経卿記』では、天正十四年七月一日に「西御方へ阿茶丸礼ニ進了、瓜廿、又御見様へ犬ハリコ三十進上了。」という記事を初出として、しばしば「御見様」の呼称で登場し、言経がその衣冠についての相談役を務めたり、笙を教えたり、光昭が踊りや演能見物に言緒を誘ったりしている記事が見える。

さて、『言経卿記』には徳田和夫氏も指摘するように<sup>44</sup>「二十四孝」の語が次の六カ所に現れる。

(一) 天正十七年(一五八九)十一月十二日。城俊来、廿四孝可校合之由有之間、教之、満一勾当同道了。

この城俊という人物は『言経卿記』の他の部分にも頻出し、ときに「座頭」「勾当」の呼称で呼ばれているが「城方流じょうかたりのりゆうの語り手座頭である<sup>45</sup>」という。城俊が廿四孝を校合したいといってきたので言経が教えたということであらう。

(二) 天正十八年(一五九〇)十月四日。城俊門マデ罷向了、二十四孝詩令借用了。

ここでは言経が城俊の家の門まで赴いて「二十四孝詩」を借用している。

(三) 同年十一月廿七日。梅庵へ罷向、廿四孝カナ注令借用了。

梅庵は大村由己。豊臣秀吉の御伽衆として活躍し、『天正記』の作者としても有名な人物である。言経はこの日、大村由己のもとを訪れて「廿四孝カナ注」なる書物を借りている。

(四) 天正十九年(一五九一)二月五日。梅庵ヨリ朝□カユ可振舞之由有之間、則罷向了、後刻四同被行了、二十四孝詩注、伊勢物語注、同哥注等、懐帑等返了、又逍遙院短冊所望間、一枚等遣了。

この日、言経は大村由己に招かれて行き、「二十四孝注」その他の書物を返却している。

(五) 文禄元年(天正二十年、一五九二)二月二日。西御方へ廿四孝屏風、カタく、阿茶丸借用申云々、絵相写之云々。

西御方とは佐超室、阿茶丸は言緒の幼名である。言緒は当時十六歳であるが、言経を通じて佐超室から二十四孝屏風を借り受け、絵相を模写している。言緒が何のために二十四孝屏風の絵相を写したのか、もしかすると龍大蔵甲本は言緒の筆か、などの想像も巡らしたくなるのだが、断定はできない。

(六) 慶長三年(一五九八)九月十日。冷泉千壽へ廿四孝書之閉之進了。

冷泉千壽は言経の室の弟である冷泉為満の長男為頼の幼名。為頼は文禄元年の生まれであるからこの時六歳である。言経は六歳の為頼のために廿四孝を書写して綴じて贈っている。言経は平家物語その他を書写したり、人に読んでやったり、疑問に答えたりしているなど、古今の書物についての造詣が深いのだが、二十四孝に関しては梅庵、大村由己からいろいろの書物を借りていることがわかる。大村由己は播州の人。長じて相国寺の仁如集堯に参し、諸家の門を叩いて和学並びに歌道を修め、後には当代における外典第一の学者と呼ばれた。号を梅庵、また藻虫斎という。天正初年より秀吉に仕えて御伽衆の一人に加えられ、大阪天満宮の別当を兼ねた。慶長元年没す。<sup>40)</sup> 由己が相国寺に入り仁如集堯のもとにいた時期は不明だが、幼年から壮年に至るかなり長い期間、相国寺で学んでいたことが現存の諸資料から推定されている。<sup>41)</sup>

大村由己が、仁如集堯のもとで「全相二十四孝詩選」の原刊本を目にし、何らかの形で原刊本もしくはその写本



を手元に所持していた可能性は十分に考えられる。斯道文庫本と龍大蔵の甲乙両写本とは、大村由己、山科言経という二人の人物を仲介者として極めて近い関係を持った写本であるといつてさしつかえないであろう。

さらにもう一つ、斯道文庫本と龍谷大学本との密接な関係を示すのは、龍大本の後ろに付けられた八景詩八首、玉潤詩四種、牧溪畫三幅の賛である。堀川貴司氏によれば、東山文庫に伝えられた抄物「瀟湘八景詩抄」には玉潤の畫の賛である八景詩八首、および、同じく玉潤畫の賛の「枯木」二首「万里江山」「薄暮」、牧溪畫の賛である「漁夫」「船子」「布袋」計十五首およびその解説が収められており、最後に仁如集堯の永祿甲午（元龜元年一五七〇）の跋文があるという<sup>119</sup>。そこで東山文庫蔵の「瀟湘八景詩抄」を検討したところ、その十五首の賛はすべて龍大寫本のもので一致した<sup>120</sup>。堀川氏の解説によれば「瀟湘八景詩抄」の最後につけられた仁如集堯の跋は、東福寺二一八世の惟杏永哲が十五首の難解な画讚に註脚をつけて仁如集堯に示したものであることを語っている。このような抄物が存在することからみると龍大所蔵の二本の後ろの十五首も、仁如集堯所蔵の写本から写された可能性が高いといえよう。なお龍大本にはこの十五首以外に子庭作石菖蒲の賛、虚堂禪師の偈一首が付されている。

以上の点からみて、斯道文庫本と龍谷大学蔵甲乙本との間には密接な関係があり、龍大乙本に「時嘉靖二十五年乙巳年刊」という記述があるので、この三本はともに嘉靖二十五年刊本系統の写しであるといえることができる。

註

- (1) 徳田進『孝子説話集の研究―二十四孝を中心に―』（昭和三十八年、井上書房）、母利司朗『全相二十四孝詩選』考―日本近世における『二十四孝』享受史の諸問題―（『東海近世』第四号、平成三年九月）
- (2) 権近校注『孝行録』の刊本は日本国内では尊経閣文庫、関西大学内藤文庫、天理大学図書館に所蔵がある。また写本には東大図書館所蔵の狩谷掖斎旧蔵書その他何種かが存在する。
- (3) 国家図書館所蔵本の書影は橋本草子『全相二十四孝詩選』

と郭居敬」(『人文論叢』四三号、平成七年)、『全相二十四孝詩選』と郭居敬(承前)』(『人文論叢』五五号、平成十九年)に紹介している。

(4) 橋本草子『日記故事』の現存刊本及びその出版の背景について(『中国—社会と文化』二二号、平成十八年六月)

(5) 阿部隆一『増訂中國訪書志』(昭和五十八年、汲古書院) 一一七頁〜一一八頁。

(6) (3)の二書を参照。

(7) 龍谷大学図書館蔵の禿氏祐祥『二十四孝詩選』(昭和二十一年、全国書房)より複写。以下、十〜十三頁の甲本の挿し絵も同じ。

(8) 母利司朗氏「竹の子三本雪の中—孝子孟宗譚の日本的展開—」(国文学研究資料館紀要第十二号、一九八六年三月)では、日本では平安後期の『今昔物語集』のあたりから「竹の子三本」を強調する孟宗譚が伝えられていたことが指摘されている。B本では生えている筍は三本、C本では二本に見える。しかしこれはともに文中の「出筍(笋)数茎」に対応するもので特に三本を意識したものではなさそうである。

(9) 楊香故事の典故は劉敬叔「異苑」巻十の楊豊の息女楊香の故事と見られる。中国での伝承はおおむね楊香を女兒とする。

(10) 原文の「得黄金一釜」の「釜」とは容量の単位。「黄金の釜」という意味ではない。詳しくは宮崎市定『謎の七支刀』

(中公新書七〇三) 一五八頁〜一六〇頁参照。

(11) 禿氏祐祥『二十四孝詩選』(昭和二十一年、全国書房)

(12) 甲本では「二十四孝」のすぐ後に八景詩その他が続き最終丁に伯愈がきているが、これは後世の改装の時の乱丁であろう。

(13) 以下、山科言経に関しては大日本古記録『言経卿記』(平成三年、岩波書店)附載の解題による。

(14) 徳田和夫『お伽草子研究』(昭和六十三年十二月、三弥井書店)三四四頁〜三四七頁。

(15) 荒木良雄『安土桃山時代文学史』(昭和四四年、角川書店) 二二一頁。

(16) 小高敏郎『近世初期文壇の研究』(昭和三十九年、明治書院) 四九頁。

(17) 庵途巖「大村由己と藤原惺窩」(『日本歴史』一九七八年十月号)

(18) 堀川貴司『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』(平成十四年五月、臨川書店) 一四〇頁〜一四二頁。

(19) 東山文庫118/2/10「瀟湘八景詩抄」(ネガ番号2280) 堀川貴司氏の提供による。

(20) (19)参照。

〔貴重な資料の掲載を許可いただいた慶応義塾大学斯道文庫ならびに龍谷大学図書館、紙焼写真を提供いただいた堀川貴司氏に感謝します。〕

海老原  
九溪  
郭君敬撰



新刊全相二十四子詩選

大舜

耕春象

隊已耕春象

紛已耘阜禽

嗣堯登賢位

孝感動天

大舜至孝父頑母嚚弟象傲舜耕於

歷山有象為之耕鳥為之耘其孝感

如此堯聞之妻之曰女讓以天下

漢文帝

仁孝臨天下

魏亡冠百五

漢廷事賢母

湯藥必親

前漢文帝高祖之子好薄太后帝

奉養無怠藥必親嘗而後進母為

仁孝之賢君也



刻木為父母形容在日新  
 寄言諸子姪聞早孝其親  
 丁蘭父母死思慕骨肉乃刻木為象而  
 事之以報其本其妻不敬以針刺之血出  
 蘭婦見之憂妻大泣不止令人父母俱  
 存者可不敬乎  
 子車宗  
 淚滴朔風寒蒲上竹教箏  
 源史春箏出天意報平安  
子車宗字恭武母年老病篤冬月思箏食宗往  
竹林中泣竹而出笑有頃地上出箏教箏  
持歸作羹供食食畢而病愈



閨損

閨民有賢郎 何曾悲晚娘

孟前留母在 三子免風霜

閨損字子鸞，早喪母，父娶後妻，生三子，母疾損

所生子，衣錦絮衣，損以金花絮，冬日令損御車

射寒失刺，父察知之，欲遣後母，損啓父曰：母在

一子寒，母去，三子單，母聞之悔，改遂成慈母

曾參

母指絕方噓 見心痛不熱

負薪歸來晚 骨肉至情

曾子名參，字子輿，其母一日有親客

至家，負薪具母噓，其指參採薪，山片

忽心痛，負薪歸，跪母問其故，母乃云



王祥

繼母人間有

王祥天下無

至今河水上

一片卧冰橫

王祥魏時人早喪母繼母朱氏不慈教誨之曰

一是失妻於父母寄欲生魚時天寒冰凍祥割冰

求之冰忽自解雙鯉躍出持歸供母每冰凍天

寒有冰卧冰上今在學慶府

老萊子

戲舞學嬌癡

春風動絲衣

雙親開口笑

喜色滿庭闈

老萊子至孝奉二親行年七十身有芭蕉爛

之衣為嬰兒戲於親側養極有脆言不稱老為

親常取食上堂詐跌而偃作小兒啼以娛親



姜詩

舍側甘泉出 一朝雙鯉魚

子能知事母 婦更孝於姑

姜詩事母至孝奉順尤篤母好飲江水妻

出六七里沂流而汲姑嗜魚膾夫婦常力作

供膾呼隣母共之舍側忽有湧泉出江水

每旦輒出雙鯉魚以供二母之膳

黃山谷

貴顯聞天下 平生孝事親

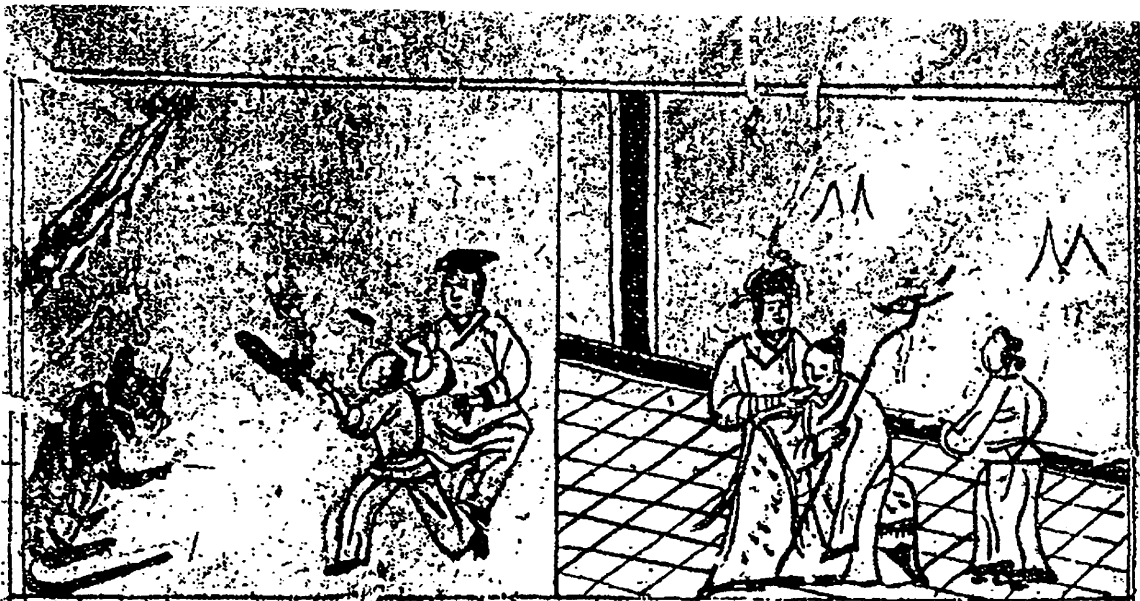
汲泉滄瀨空 婢妾豈無心

黃山谷宋時人時推為江西詩祖元祐中

為太史性質至孝奉母安康郡君每

親為母滌溺器未嘗頃刻不供子職





唐夫人

孝敬崔家婦 乳姑晨盥梳

此恩無以報 願得子孫如

崔山南家之盛 婦族宗北山南 曾祖生母長

孫夫人年高無齒 祖母唐夫人 事姑孝每旦

櫛 縱筭拜於階下 即升堂乳其姑 長孫夫人

不粒食數年而康寧 一旦疾病長幼咸集

宣言無以報 新婦恩願 新婦有子有孫皆

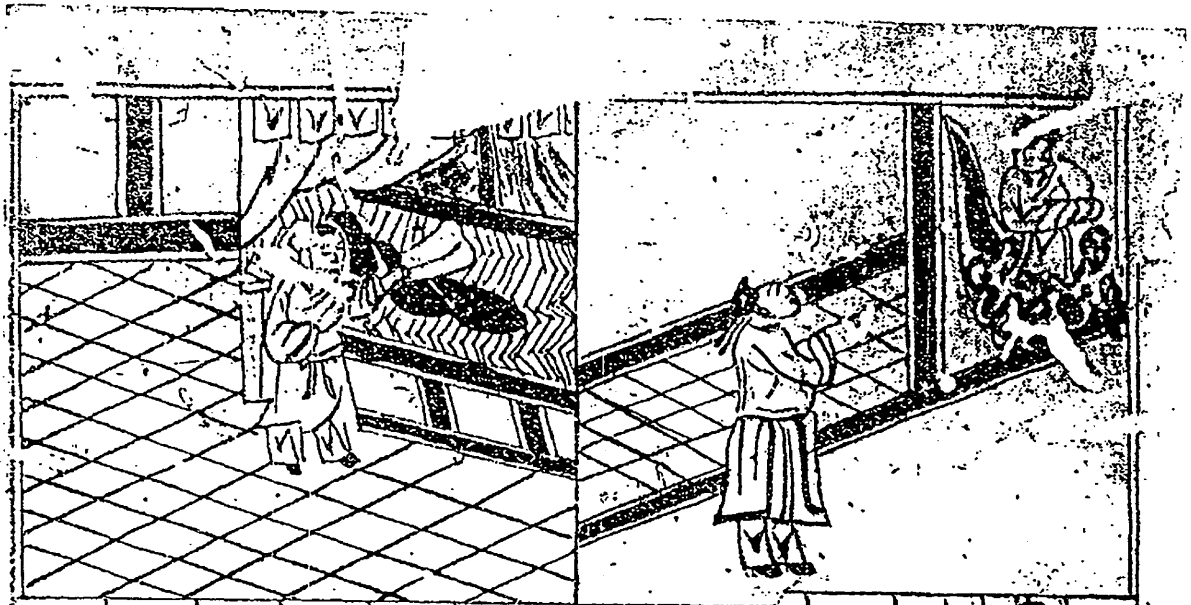
保如新婦孝敬 則崔之門安得不昌大乎

楊香

深山逢白額 努力搏腥風

父子俱無恙 既身能口中

楊香其父為虎曳去 香搏虎遂免於害



董永

董父貧方死 天姬陌上迎

織絹償債主 孝感盡知名

董永字延年後漢人家貧傭力父死貧

錢一萬而董道過一婦人求為永妻

俱詣主人家令織絹三百疋一月而畢

輒辭永曰我天上之織女聞君至孝

天帝令我助君償債言訖凌空而去

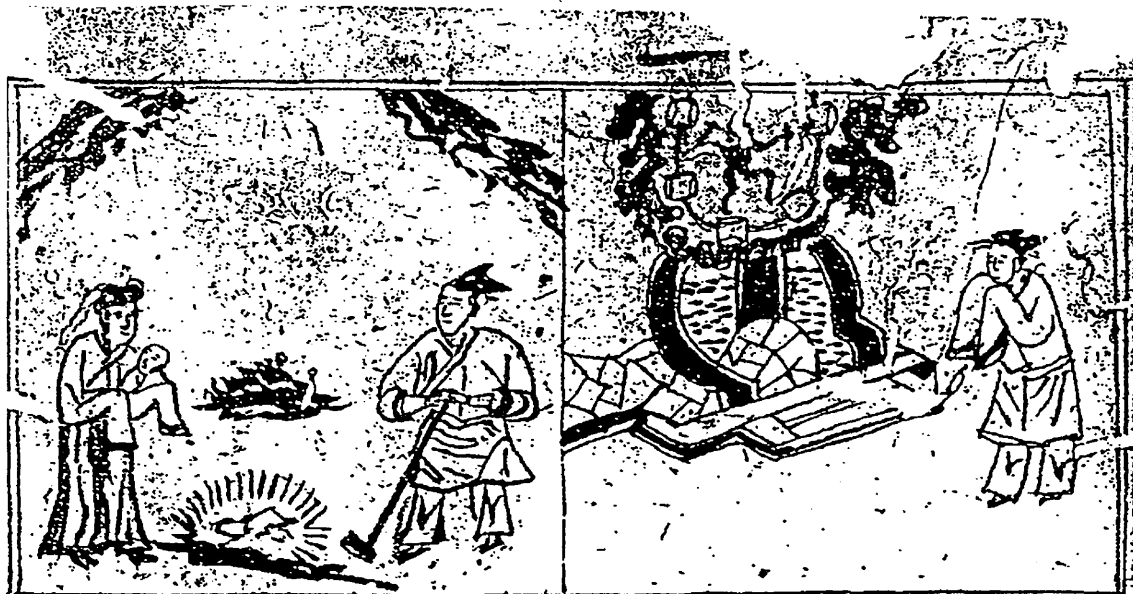
黃香

冬月溫衾煖 夏月扇枕涼

見差知子職 千古一黃香

黃白字文強九歲失母事父及孝暑則

扇其衾席寒則以身溫被太守劉護表而累



千衷  
 慈母怕聞雷 水菟宿夜臺  
 河香時一震 到墓遠千迴  
 主衣字備元至 奉母平生畏雷既死而葬  
 遇雷震即至哀台 哀在此勿懼  
 郭巨  
 貧乏思供給 埋兒願母存  
 黃金天所賜 光彩照寒門  
 郭巨字文舉 妻生一子三歲母常減食  
 與之巨謂妻曰 貧乏不能供給共汝埋  
 子子可存有母 不可存得妻泣而從  
 之遂掘坑三尺 得黃金一釜上云天  
 賜孝子郭巨官 不得奪民不得取



朱壽昌

七歲生離母

參商五十年

一朝相見

喜氣動皇天

朱壽昌生七歲父出其母母子不相見者五十

年壽昌行四方求母不遇與人言輒流涕熙寧

初尋官入秦與家人訣誓不見母不復行次

同州道為劉氏年七十餘吳東坡有詩羨

朱子

老親思鹿乳

身掛褐毛衣

若不高聲語

山中帶箭歸

矧子父母年老俱患双目思食鹿乳

矧子衣鹿皮入鹿群中以取鹿乳

者目欲射之告許乃免



孝順

黑椹奉親闈 啼飢淚滿衣

赤眉知孝順 牛米贈君婦

蒸頓汝南人王莽不天下大荒順拾糶黑赤異

器古也赤眉賊見而問之曰黑者奉母赤者自

食賊知其孝乃遺米二斗牛蹄一隻而去

一又黔婁

到縣未旬日 椿庭遘疾深

願將身代死 北望蒼天憂心

唐黔婁南河時人為孀後令到縣未旬日忽

染疾流涕曰吾官歸家父疾已二日醫云欲知

瘥否但嘗蜜甜苦則為佳黔婁取蜜味轉

甜得愈夏苦至秋積薪北辰求以身代



果猛

夏夜無帷帳

蚊多不敢揮

恣烹膏血飽

免使入親闈

猛年八歲有孝行家貧無帷帳夏  
不驅蚊恐去已分噓其親也

張老張禮

偶值綠林兒

代身云瘦肥

人皆有兄弟

義氏古今稀

張孝張禮家貧兄弟二人禮養母拾  
菜於路遇賊將烹食之禮云乞回家  
供母早食却來就死孝聞自詣賊曰  
禮瘦不如奉肥願代弟命禮曰本  
許殺勿然五世兄賊見二人孝義俱捨



置

海底紫珊瑚 群芳總不如

春風花滿樹 兄弟復同居

田與田廣田慶兄弟欲分財產堂前紫荆一

株老葉茂盛夜議研分為三曉即推梓真乃

嘆曰樹本同株聞分研尚如此人何不如也

兄弟固是不復分焉其花再發

陸績

孝悌皆天性 人間六歲兒

袖中懷梨橘 遺母報舍餘

陸績字元直年六歲於九江見表術術出稱結

懷三枚去拜隨母曰陸即作客客而陸稱

手績跪答曰欲歸道母術太奇矣

135474  
8021.5



新刊全相二十四孝詩選

延平尤溪郭居敬撰

大舜

隊二耕春象 紛二耘草禽

嗣堯登寶位 孝感動天心

大舜至孝父頑母嚚弟象傲除

耕於歷山有象為之耕鳥為之耘其

孝感如此堯聞之妻之二女讓以下